

「かごしまの

黒の力、工芸編」

土地には風、水、光、色があり、与えられた環境を活かした人の営みがあり、時代の流れとともに、求められるモノは変化しているが変わらぬものがあります。また、素材、技、モノづくりに対する職人の魂でもあります。

今回は、黒を冠した「工芸品」をテーマに、国指定伝統的工芸品に指定されている「本場大島紬」「薩摩焼(黒薩摩)」を紹介し、「育て、守り、拡げ、伝える」ことについて考えます。

奄美に守り継がれる 黒紬の可能性を広げた 伝統とモダンの融合。

原絹織物株式会社
本場奄美大島紬



▲原絹織物株式会社
代表取締役 原正仁氏

昭和22年、奄美に生まれる。伝統工芸士であった父の指導を受け、仁左エ門を伝承する三代目として大島紬の全工程をマスター。平成10年、自らも伝統工芸士となる。工房では機織り・泥染め体験の希望者を受け入れ、島唄など紬以外の奄美文化の紹介にも努めている。

デザイン st+to(スト)
辰野 しずか 河東 梨香

千年の時を越えて受け継がれる奄美大島の伝統工芸品『本場奄美大島紬』。その精緻な柄柄

は、気の遠くなるほどの数々の工程を経て何人もの職人の思いが重なり、織り成される。なかでも特徴的な工程が、絹糸を独特の艶めいた黒に彩る『泥染め』だ。まずは奄美に自生するテ

チ木(シャリンバイ)のチップを煎じて糸を浸し、液を幾度も入れ換えながら二十回染める。その後、泥田に赴き、島特有の粒子の丸いミネラル豊富な泥で染めると、テーチ木のタンニンと泥中の鉄分が反応して美しく発色する。この作業を、鉄分含有量の異なる数ヶ所の田んぼで五回も根気よく繰り返すことで、大島紬の原点とも言える鳥の濡れ羽のような深い色合いへと仕上がっていく。

の三代目として古の技を守りながら、伝統とモダンの融合にも取り組んでいる。その挑戦の中で生まれたのが、大島紬ネットワーク『EIT(イトウ)』だ。若手デザイナーとタイアップし、奄美の土地柄や人々の暮らしとつづ、日本のみならず海外の人の視線にも触れるようなデザインを目指した。共に悩み考え、試作を重ねること十カ月。完成した斬新かつ上品なアクセサリーは、2014かごしまの新特産品コンクールにおいて鹿児

島県知事賞を受賞。その反響は大きく、様々な展覧会やセレクトショップへの出品依頼が舞い込んだ。『EIT』は奄美の言葉で『糸』のこと。大島紬の着物用に染め付けられていて柄が一点ずつ異なることから、身に付ける人との巡り合わせを大切にしたいとの思いも込められている。「強い思いが先にあって、志に共感できるデザイナーと出会えば、賞までいただけただけ。今でも何だか不思議な気がしています」。時をほぼ同じくして、全国各地の伝統工芸の担い手たちと意見交換する機会も増加。有田焼創業四百年(平成二十八年)のプレ事業として佐賀県から依頼を受け、有田焼と大島紬のコラボレーションによる行燈を制作するなど、様々な人との縁を通じて新たな創作の場が広がっていったのだという。現在もいくつかのプロジェクトが進行中だ。

職人の高齢化に伴って年々その数が減少する中、後進の育成にも常に思いを巡らせている。大島紬の全工程の技術を修得するとともに、奄美の自然や他の産業についても体系的に学べる場を設けることができればと、夢は膨らむ。世界自然遺産登録への取り組みも進む奄美大島。その地を代表する伝統工芸品を未来へ繋ぎ、より発展させていくことは自らの責任でもあると考えている。これからも、作り手も受け取り手もハッと驚きワクワクできるような、新しいことに挑戦し続けていくつもりだ。



itu
ITU

After one thousand years,
the tradition of silk rearing
still lives in the Amami Islands.

1000年のときをこえ
奄美の島に息づく
絹の宝石

©stramon.jp/itu/

黒薩摩の伝統を継承し 新たな表現を生み出す 陶工の静かな情熱。

薩摩長太郎焼本窯 薩摩焼(黒薩摩)



▲薩摩長太郎焼本窯
四代 有山長佑氏

昭和10年、三代長太郎の長男に生まれる。多摩美術大学を卒業後しばらくは別職に就くも、ヨーロッパ留学中、旅先で偶然触れたアジアの工芸品に心癒され、四代の継承を決意。多数の受賞歴や皇室献上品の制作、審査員としての実績を持ち、日展鹿児島会会長などを務める。



長太郎焼は、かつて島津家の御庭焼を務めた初代長太郎によつて開かれ、かの画聖・黒田清輝が一流と認めてその名を付けた黒薩摩の名陶である。薩摩焼の代表的な酒器『黒千代香(く

ろぢよか。焼酎が千代に香るという意味が籠る)』も、初代長太郎が考案したものだ。鹿児島市谷山にあった本窯を受け継ぎ、現在は下福元の静かな高台に工房を構える四代・有山長佑氏。御年八十歳を目前に、

まずまず精力的に制作を続けている。

「こちらは何十、何百と作りますが、使う人にとってはどれも大切な一点。だから一つ一つに真心を込めています」。寒い冬も手作業で冷たい粘土をこね、型は使わずろくろを挽いて成形することにごだわるのには、そんな思いがある。陶器は焼き上がる中で収縮するため、完成した時の寸法まで計算に入れながら、花瓶や湯呑み、モダンなコーヒークップまで、暮

らしにしつくり馴染むあらゆる日用品を作る。

黒薩摩の一番の特長といえ、その色。しかし、同じ『黒』でも窯元によつて微妙に味わいが異なる。うつつらと茶を帯び、どこか土の温もりも感じられる

長太郎焼の黒物の秘密は、化学薬品を一切使わずに調合する釉シラス層のうち、酸化鉄を多く含む層から自然石を採取し、砕いて木灰と混ぜ合わせたもの。天然由来であるがゆえに、通常より高い焼成温度でなければうまく流れない。ちよつとした天候や気圧の変化にも出来を左右されやすいが、醸し出す肌合いは柔らかで、使えば使うほどに光沢と渋みを増す。

数々の展覧会で賞を受賞してきた長佑氏の作品は黒物だけではなく、貫入(白薩摩の特徴である微細なヒビ)のない白磁の

ような白物を生み出したり、趣味の釣りをしながら見上げる青空を釉薬の色模様で再現したりと、今もなお自身の思い描く理想美を追い求めている。

そんな革新的な表現を模索するのにも、原点となるのはやはり、先人たちが培ってきた伝統だという。黒千代香を考案した初代も、元々お菌黒の染料を煮ていた昔ながらのやかに着想のヒントを得た。古きを知り、生み出されたデザインに備わる普遍的な魅力。日本のみならず世界中で愛されている薩摩焼のそれを、いかに受け継いでいくか。若手作家の育成や地域芸術の啓発への取り組みも賞賛され、平成二十二年に地域文化功労者文部科学大臣表彰、同二十四年には鹿児島県民表彰を受けた。

家業を継ぐまでには様々な葛藤があり、なかなか納得のいく

ものができない苦しみにもがくこともある。陶芸家人生を振り返つてそう語る表情はしかし、穏やかで優しい。制作中はひたすら無心で、そのことが喜びでもあるという。エネルギーの源は粘土と言いつつ、今日も自然体で作品と向き合っている。

